

士幌高原道路に代わる地域振興策を検証する

ルポライター 滝川 康治

「環境重視」が「ハード優先」が露呈した道と自治体のギャップ

くすぶる不信感と漂う冷めた空気

道の「時のアセスメント」で士幌高原道路（道道士幌・然別線）の未開削区間の工事中止が決まってから、もうすぐ二年になる。道は中止決定後、士幌・上十幌・鹿追・音更の地元四町が取りくむ代替振興策を支援する方針を表明し、昨年来、地元自治体と事務レベルの協議を続けているが、地域住民が具体的なイメージを理解できる形には至っていない。

「建設促進運動に携わった人の一部には『なぜ、高原道路ができないのか。あきらめず、時期を見て工事を再開してもらおうべきだ』という声がかすぶっ

ている。掘知事が地元に来て中止理由を説明し、詫げるものは詫げるという終戦処理をすべきですよ。けじめをつけないからモヤモヤして、代替振興策のこともすっきりしない」

前上幌町長で促進運動の先頭に立つてきた小川寅之助さんは、こう言っている。掘知事が地元に来て中止理由を説明し、詫げるものは詫げるという終戦処理をすべきですよ。けじめをつけないからモヤモヤして、代替振興策のこともすっきりしない」

「道路をやめた対策だろう」と思っ

ではいるが、(四町が振興策の目標に掲げる「農業・環境・観光」について)農業分野は全町民に関わらないし、環境関連はよく分からない、観光の方策は何も出ていない、という感じではないですか。知識や経験がないのでピンときていない」

と解説してみせる。

小川さん自身はいま、「北十勝に生きる振興策を残すべきであり、道には期待する」気持ち強いと言いつつ、士幌町が挙げている振興策(後述)の課題を一つひとつ説明してくれた。

北十勝の住民有志が東大雪地域フォーラム実行委員会(平田昌亮代表)を組織し、今年一月から二月にかけて、住民サイドから振興策のアイデアを話し合う懇談会を四町で開いた。同委員

「時のアセスメント」によって建設中止が決まった士幌高原道路に代わる地域振興策をめぐって調整作業が進んでいるが、ハード優先の振興策をまとめた地元自治体と環境重視のソフト事業に期待する道の間にはギャップもみられる。「中止後」の現状と、ようやく本格化してきた代替振興策をめぐり動きをレポートする。



「時のアセス」で未開削区間が建設中止になった士幌高原道路。このゲートからトンネル予定地までの掘りも、課題に残る(写真上)。建設中止になっても外されない「道路促進」の看板(士幌町内で・写真右)

会の事務局長で、アウトドア活動の普及などに取りくむ原尾進さん(士幌町在住・商業)はこのとき、アイデア募集のチラシ二千二百枚を町内に配布したが、寄せられた意見はゼロだった。

「町内では、我々が民間サイドで振興策を話し合っただけで、高原道路を推進してきた人たちも真剣に考えていない。『農家一戸の定期性貯金が平均七千万円もある士幌町を、何で振興しなければならんのか』という声まで聞いたし、振興策の話は一部の人でやっている感じがするね(原尾さん)」

行政や一部の関係者は振興策を真剣に考えているものの、かつて「道路促進」に燃えた士幌町内の空気は、冷めたものがあるようだ。

農業・観光・環境が振興策の三本柱

ここで、事業の中止決定から振興策の策定に向けた動きを大雑把に振り返っておこう。

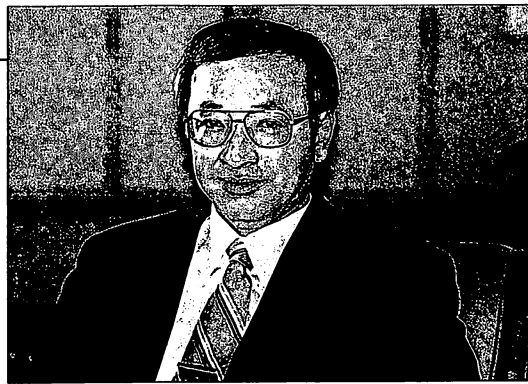
士幌高原道路の「時のアセス」は、大雪山国立公園の自然環境に与える影響や道路整備による効果について、道の事業推進部署(建設部)とアセスの陣頭指揮をとる部署(総合企画部)が正反対の評価結果をまとめた末、昨年三月、掘知事の判断で未開削区間約二・七キロの建設中止が決まった。

道は「中止する代わりに、地元がつくめる地域振興策を支援する」との方針

を表明したが、知事みずから地元を訪れて経緯や今後の方針を説明せず、同年七月になって帯広市内で地元四町長と懇談するという、きわめて中途半端な対応をした。わたしは、環境保全を理由にした知事の「中止決定」を支持する一人だが、庁内の合意がない状況でトップが政治判断した以上、堂々と地元に出向いて説明すべきだった、と考えている。いつまでたっても役人を卒業できぬ堀氏には、無理な話かもしれないが……。

昨年夏には、地元の受け皿組織として、高原道路促進の連絡組織を衣替えする形で、北十勝四町地域振興連絡協議会(町長と町議会議長で構成)が発足。道側も、本庁と十勝支庁に「士幌高原地域」振興策検討プロジェクトチームを設置し、振興策に対する道の考え方をまとめ、具体的な支援策を検討していくことで足並みをそろえた。

士幌町では昨年から振興策に対する住民の意見を募集し、四町の協議会は今年になって、地元の農業団体や青年・女性組織などの代表二十人を集めて「意見を聞く会」をつくった。「聞く会」の初会合(2月)では「住民の



「振興策が実現してこそ問題解決」と話す土幌町の小林康雄町長

話を聞いたという形だけをつくるのではなく、住民の意見を振興策に反映させるべきだ」との発言が出た（3月4日付け「北海道新聞」）。関係者によると、「聞く会」では行政の案に対する質疑が中心で、議論はいま一つのようだった。土幌町役場でもらった第三回の記録を見ると、一時間の会合の大半を事務局の説明に費やし、四人の委員が意見を述べるにとどまっている。

四町の協議会は四月、こうした流れを受けて「振興策の基本的考え方」をまとめた。然別湖があり、ファームインも盛んな鹿追町は「観光」、広域交通の拠点になっている音更町は「ゲート機能」、東大雪博物館などがある上土幌町は「環境」、馬鈴薯コンビナートなどがある土幌町は「農業」を、振興策の中心にすえた。そのうえで、広域連携の核となる施策として、

①農業・自然体験などの要となる人材を育てる「交流産業担い手育成プロジェクト」

②バイオガスを取り入れた「循環型農業システムプロジェクト」

③河畔林の造成や植樹などを行なう「流域環境保全プロジェクト」

④点在する観光資源をつなげる「ネイチャーネットワークプロジェクト」の四つを挙げている。

こうした概念的な「考え方」を基にして、四町は振興策となる事業をリストアップし、道に提示した。

既存施設の再整備や景勝地の再開発事業など二十二の振興策が盛り込まれており、ハード優先の発想が目だった。「時のアクセス」の経緯に疎い、総事業費が百億円を軽く突破するあれもこれものリストに、道の担当者も困惑した。

土幌町の素案は 人材養成など三つ

土幌町は具体的な振興策として、

①家畜糞尿などの処理を地域内循環システムとして行なう研究・実証施設「バイオガスプラント」の設置

②町立土幌高校と連携してアウトドア指導者や農村観光の担い手を育てる「自然体験人材養成事業」

③土幌高原にある「ヌブカの里」への「環境教育センター」の設置の三事業をまとめ、道に素案を示している。小林康雄町長は、

「町民のなかには福祉を含めた通常のインフラ整備を求める声もあったが、代替振興策の性格から入れなかった。知事が四町長と会ったときに『全国のモデルになる振興策にしたい』と約束したことであり、きちんと実施してこそ土幌高原道路問題が解決したことになる。ぜひ実現してほしい」と、道に対して期待を寄せる。

バイオガスプラントは、十戸ほどの農家が主体となり、二千五百頭規模の牛の糞尿と馬鈴薯コンビナート（土幌

）と、道に対して期待を寄せる。バイオガスプラントは、十戸ほどの農家が主体となり、二千五百頭規模の牛の糞尿と馬鈴薯コンビナート（土幌

）と、道に対して期待を寄せる。バイオガスプラントは、十戸ほどの農家が主体となり、二千五百頭規模の牛の糞尿と馬鈴薯コンビナート（土幌町）と、道に対して期待を寄せる。

と、きびしく注文をつける。

冒頭で紹介した原尾さんは、行政の

「ヌブカの里」にセンターハウスを造る構想があるが、「自然を利用する発想は疑問」の声も

の気持ちは理解できるものの、環境保全のために土幌高原道路が中止になった経緯を振興策にどう反映させようとするのか、担い手養成や環境教育に不可欠な人的ネットワークをどのように創ろうとしているのか、よく伝わってこなかった。

住民主導で議論し 自治体側に提言も

前出の東大雪地域フォーラム実行委員会は今年三月、住民サイドでまとめた振興策を四町の協議会に提案している。

そこでは、北十勝の自然環境の現状について、開墾と造林によって森林が変貌し、河川改修やダム建設で河畔林が喪失して多様な生き物が減り、十勝農業の安全性に疑問があり、登山客の過剰な入り込みで自然に悪影響を与えている——などと懸念を表明する一方で、次のような提案を行なった。

①音更川や然別川の源流部にある国有林伐採跡地での森林復元など「自然環境の再生のための協働計画」

②安全な農産物の生産体制の確立と支援

③四町の観光拠点を結び、自動車による移動を抑えた、サイクリングや乗馬・ハイキング・スキーなど多様な交通手段による「人間回復ネイチャーネットワーク」の整備

④環境・自然教育など多様な事業を総括し、人材育成を図る「北十勝21世紀財団（仮称）」の創設

これらの提案の一部は、のちに同協議会がまとめた「基本的な考え方」に取り入れられている。

実行委員会は昨春秋、商店主や建設業者、医師、学芸員、主婦らが自発的に集まって発足した。住民主導で代替振興策のアイデアを出し合うことが目的で、「土幌高原道路が中止に至った経緯に言及しない」「民間の発想で地域を見直し、行政依存の体質を改善していく」「行政との連携を図る」などが運営の基本。四町でフォーラムを開催し、延べ百人あまりが参加した。

公共事業の中止後の振興策をめくって住民が自主的に討議するのは全道的にも貴重な試みであり、地域を思う真剣な思いが伝わってくる。十勝支庁などの担当者は四町ともフォーラムに参加したが、地元四町の担当者はほとんど

町）やよつ葉牛乳（音更町）の残渣などを使ってメタンガスを発生させ、地域内で利用するシステムを研究・実証する構想。農家有志らが数年前から先進地の視察などを積み重ねており、その活動の延長線として計画した。

自然体験の人材養成は、高卒以上の人を対象に専修学校的な施設を整備し、二年間にわたって観光や自然体験にかかわる幅広い教育を行ない、指導者を養成する、というもの。「この種の学校は国内になく、土幌高校の空き施設などを提供するのでは、道が新たな施設を整備してほしい」（小林町長）。

「環境教育センター」は、国立公園内に町が整備してきた「ヌブカの里」に宿泊・研修ができるセンターハウスの建物を建設し、自然体験や交流の拠点にする、という構想だ。

いずれの事業も道がハード面を整備し、地元が協力・参画するという考え方で、議会内にも道が責任をもって支援するよう求める声強い、という。年内に「意見を聞く会」を開いたあと、来年一月には地元としての振興策をまとめる予定だ。

小林町長の話を聞いてみて、関係者

自然を利用して人を育てようとしている。十分な自然環境のないところに施設を造る悠長な状況ではないし、自然は利用するより保護を優先すべきだ。人材養成が悪いとは思わないが、環境重視のために土幌高原道路を中止した原点を踏まえようとして取りくむべきではないか。従来の開発の延長線に振興策を考えてはいけない。自然環境を再生・保全・復元するための振興策にこそカネを出すべきです」と、きびしく注文をつける。

「ヌブカの里」にセンターハウスを造る構想があるが、「自然を利用する発想は疑問」の声も





住民有志が開いた東大雪地域フォーラム。出されたアイデアをまとめ行政側に提言した（今年2月、札幌市内で）

振興策に限界を感じ、マイペースで活動することにした。最近、十幌町内に「環境教育・アウトドア活動サポートセンター」を設立し、民間財団の助成を受けて簡易水質検査器や視聴覚機材などを購入する一方で、学校と協力してリリーダ―養成やパネル展の開催などを始めている。自治体が進める振興策

環境優先の事業へ 試される行政対応

に欠けているのは、こうした民間活動と連携して人材養成や環境学習に取りくむ発想ではないだろうか。

道は、振興策を支援する条件として、①四町の合意のもとで取りくむ課題であること

②環境に配慮したモデルになる事業をつくっていく

③モノを造ることだけでなく「地域振興につながる取りくみとしてどうか」という視点を持つこと

の三つをクリアすることを挙げる。しかし、地元自治体は未だに「ハコもの“優先の施策から脱却できず、課題は山積している。

道側は「地元側の発想はハードの要素が多いが、あくまで『ソフトを実施するために必要なハードを整備する』という考え方で臨みたい」（伊東和紀・地域政策課長）との意向だが、地元側は「ソフトはハードがあつてこそその振興策であり、四町が示したものは控え目な要望」（小林・十幌町長）と、

捉え方にかなりギャップがある。

民間サイドのアイデアについても、道側が「東大雪フォーラムの提言は大事な視点が盛りられており、こうした発想をぜひ地元の具体的な計画のなかに盛り込んでほしい」（伊東課長）と期待を示すが、地元自治体は住民の提案を施策に反映させる経験が乏しいのが実態である。今後は、住民・地元四町・道の三者が一堂に会して、率直に議論を交わせる場を設けるよう工夫してはどうだろうか。

十幌町が挙げる「バイオガスパラント」にしても、道開発局が別海町と湧別町で類似の実験施設を建設中であり、十勝の独自性をどう示すのか、一般の農業施策との違いは何か――など、課題の整理が必要ではないか。



独自に環境教育のサポートセンターを立ち上げた原尾進さん

道は十二月上旬、重点的に支援する事業として、次の三つをまとめた。

①マスタープランの策定など流域環境保全のシステムづくり

②バイオガスパラントを整備する家畜糞尿処理システムづくり

③自然体験指導者養成所の整備など地域特性を生かした担い手づくり

来年度、この三事業を検討するための調査を実施し、その結果によって二〇〇二年度以降に具体化させる。地元自治体が要望した他の事業は、既存制度を活用したり、地元の単独事業などで対応してもらおう方針という。「時のアセス」の結果や財政状況を踏まえ、地域住民のアイデアや提言を生かした施策を実現できるかどうか、道の地元自治体の力量が試されている。